

# プラハ日本人学校中学部における総合的な学習と遠足の取り組み

前在チェコ日本国大使館付属プラハ日本人学校教諭

岡山県岡山市立光南台中学校教諭 富岡 直樹

キーワード: 在外教育施、チェコ、総合的な学習、宗教、思想

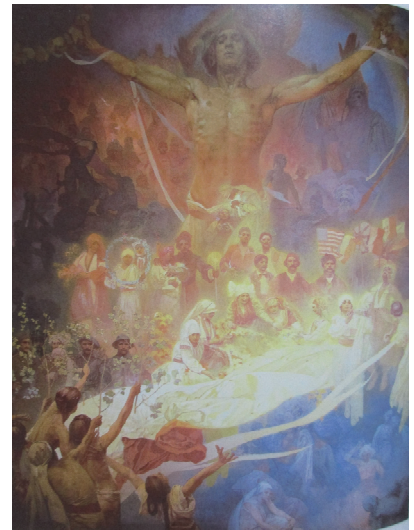
## 1. はじめに

ヨーロッパには多くのキリスト教会があり、チェコ国内においても様々な宗派の教会が存在している。ところがチェコ人の34.3%が宗教をもっていないと回答し(2011年)、神が存在すると信じると回答した人は16%に過ぎない。

(『Czech and Statistical Office 2010』より) しかしチェコの人々は祖先の墓を頻りに訪れる習慣がある。こうした宗教観はどのようにして生まれているのだろうか。中学部で現地文化理解の一環として遠足を実施するにあたり、この疑問を明らかにする必要がある。まずは1年目の遠足の事前学習の題材にアルフォンス・ミュシャを取り上げた。2年目には神聖ローマ帝国(カトリック)と戦ったヤン・フスおよびヤン・ジシュカについて学んだ。3年目は複雑な歴史的な経緯を歩んできたチェコをチェコスロバキアとして建国させたT.Gマサリクと建国の経緯を学んだ。そしてこれまでの歴史と現在のチェコを結びつけるために共産主義からの独立を果たしたビロード革命とヴァーツラフ・ハヴェルについて学習した。本稿ではこれらの学習の様子と内容の概要を紹介したい。

## 2. アルフォンス・ミュシャについて

平成29年度は画家アルフォンス・ミュシャについての学習を行い、ゆかりの地ズビロフ城を訪れた。ミュシャ(ムハ)はズビロフ城でスラブ叙事詩という20枚の絵画を制作する。制作されたのは1911年から1926年で、チェコスロバキア建国に向けて民族自決の機運が高まっていた時期であり、このなかでスラブ民族のあゆみを描いている。この絵画を見ていくことでチェコの精神性を垣間見ることができる。チェコでは古代ケルト人の古代遺跡が多く出土する。ケルト文化は、現在ヨーロッパ北西部に存在している。しかし本来はチェコ周辺が発祥である。かつては周辺で古代ケルト人が安定した生活を送っていた。そこに3~6世紀に現在のウクライナ周辺のサルマティアにスラブ民族が定住した頃の様子が1枚目の作品である。さまざまな外敵民族の襲撃にさらされながら、自然を崇拝している様子が見える。このあと、正教会のギリシャアトス山やヤン・フス、ヤン・ジシュカ、ヤン・ミリーチ、コメンスキー、トルコの襲撃、30年戦争、ロシアの農奴制廃止、第一次大戦、オタカル2世などが描かれる。



「スラブ叙事詩」  
『アルフォンスミュシャ展』  
求龍堂より

長い間、ドイツのアーヘンに始まる神聖ローマ帝国の一部に所属しながらもカトリックではなく、正教会を心の支えとしていた事も読み取れる。フランスやアメリカでデザイナーとして名声を得ていた彼が作曲家スメタナや画家ゴーギャン、シオン修道会やフリーメイソンとの関わりもあり、チェコの民族意識を呼び起こすために献身的に行動していた。このようにミュシャの生い立ちと「スラブ叙事詩」からチェコの人々のあゆみを学習してから、遠足でズビロフ城を訪れた。現地ではミュシャの部屋やアトリエとなったホールなどを案内していただき、ミュシャをより身近に感じることができた。「スラブ叙事詩」は2017年に日本で展示公開されたが、2018年は建国100周年ということもあり、チェコでもあらためてこれらの絵を直接見る事ができた。見学に訪れた生徒も多く全20作品に込められた思いを感じながら鑑賞することができた。今後、当面の間は展示される予定がないので貴重な経

験となった。

### 3. ヤン・フスとヤン・ジシュカについて

平成30年度はヤン・フスとヤン・ジシュカについての学習を行い、ゆかりの地ターボルを訪れた。中世の宗教改革のきっかけとなったフス戦争はいかにしておこったのか。ヤン・ジシュカはどのようにして戦いに勝つことができたのか。といったことについて学習した。フスの死刑、フス戦争、カトリックとプロテスタントの関係、30年戦争、その後の被支配の状況などを学習した。そこからは自分たちの力ではどうにもできない時代や運命の流れに身を委ねるしかない状況が見えてくる。フス戦争の拠点となったターボルのフス博物館を訪れると、以上のことが分かりやすく解説されており、チェコの子どもたちにも浸透しているように思われた。本校の生徒にとってチェコ語の解説文は難しかったが、大まかな歴史の流れを捉えることができた。そして遠足では建築ウォークラリーを通して、カトリック教会（神聖ローマ帝国）と戦ったフス派の人々や中世の歴史を身近に感じることができた。ところがこの遠足で1つの疑問が生



「ターボルのヤン・ジシュカ像」

まれた。ターボル市街にはこうした歴史と由緒あるものが多くあるにも関わらず、教会はあまり整備されていない様子だった。一方、きちんと整備され観光や巡礼で多くの人が訪れる教会がターボルの市街の壁の外にあった。その形態はあきらかに東方正教のものだが、祀られているのはヴァーツラフ教会（プラハ城）とおなじヤン・ネポムツキー（1340～1393）である。宗派の所属はカトリックとなる。実はカトリックと袂を分けた正教会でありながら、教会を維持していくためにカトリックに所属していることがわかった。チェコには多くのこうした巡礼教会がある。様々な巡礼教会や街角にあるネポムスキー像を、チェコの人々は日本の観音像のように願いを叶えるための象徴のように崇めている様子を見ることができる。私は在欧の機会にできるだけ多くの教会のミサの様子をうかがうことを心がけた。そこで幾度かロシア正教やギリシア正教のミサを見る機会があった。そこで分かったのはやはりチェコ国内の教会の多くの形式はカトリックという事である。ロシア正教（エストニア、ラトビア、フィンランド、イギリス）やギリシア正教（イギリス）のミサに参加する人のイコンへの信仰心は大変なもので、また教会で行われる読経も日本の天台宗の読経のように美しい音律による様式化されたものである。チェコの正教会の多くは歴史的な経緯でカトリックに所属している宗派が多い。チェコの正教会も読経があり様式化されているが、ロシア正教やギリシア正教と比較するとイコンも信者も少ないように見受けられた。一方、プロテスタント教会もチェコにはいくつもある。しかし北欧やオランダ、ドイツのような大きなプロテスタント教会を見つける事はできなかった。北欧やオランダ、ドイツのプロテスタント教会は地域に開かれていて、日曜日は地域の公民館の様な雰囲気だった。むしろ宗教色を無くし、現実のコミュニティの大切さを優先することに成功しているように思われた。日本のプロテスタント教会は比較的大きな建物は少なく、家族的な雰囲気を大切にしていると思われるがチェコのプロテスタント教会も家族的な雰囲気が感じられた。

### 4. T.Gマサリクについて

2019年度はT.Gマサリクについての学習を行い、ゆかりの地ラーニを訪れた。この事前学習としてT.Gマサリクが1918年にどのようにしてチェコスロバキアという国を建国することができたのかを学習した。遠足ではT.Gマサリク博物館を見学し学芸員に質問をしたり、ラーニ城公園や自然公園を散策したりしてマサリクやチェコ建国の事をより深く学ぶことができた。第一次世界大戦では民族自決の機運の中で多くの国が独立を果たした。しかしマサリクの行動がなければ到底建国は果たせなかったことがわかった。ラーニはマサリクが大統領時代に居住し一生を

終えた地で、T.Gマサリク博物館がある。マサリクはプラハ大学の哲学の教授で思想史の専門家である。当然、各国の精神思想史にも精通しているので異なる民族をどのようにまとめていけば良いのかを常に熟慮し、チェコの人々も表面上はハンガリー=オーストリア帝国に所属しカトリックであっても、内面は異なっているという現状に基づいて考えている。またチェコ人の優秀な軍事能力を引き出すことにも長けている。そこで第一次大戦ではドイツの傭兵でありながら、敵の捕虜になり、ロシア、イタリア、フランスの兵として戦わせるようにしていた。また、世界中の要人とネットワークをもち、シベリア経由で日本の寺内総理大臣に支援を依頼し、シベリア出兵まで導いている。チェコ人がロシア兵の傭兵として戦うためのロシア軍軍服は日本製である。このことは日本の支援が見せかけではなく、チェコ独立に向けての物的支援にまで及んでいることを意味している。第一次世界大戦後、チェコはスロバキアと合併する形で独立する。また多くのユダヤ人が定住することが優遇される。いずれもチェコの経済発展のために不可欠な政策である。これらの事が長年の精神思想史の研究の幅広い知見に基づいて行われたことがわかる。ヨーロッパの諸国はその国を維持していくために宗派、言語、軍事、民族、文化、通貨など多くの面で周囲の国と折り合いをつけるために内面とは違う形態をとっていることが多い。チェコにおいても上記のような経緯で、現在のような宗教観になっていると思われる。つまり、過去の歴史を見たときに、特に宗教において主義主張を唱えて戦った事に誇りを持ちつつも、小国なために必ずしも優位な結果を得られなかったこと。しかし、現在のチェコがあることについて先人にたいする尊敬の気持ちが高いことから、宗派に振り回されずに祖先の墓と向かい合うという状況になっていると思われる。こうした精神性をもつチェコを現在も続く共和国として独立させたT.Gマサリクの巧みな手腕と周囲の思想家の発想には驚かされる。一方でT.Gマサリクは「世界は、慎ましい、恒常的な仕事によってのみ維持されている」(我々の今日の危機)と述べている。(『マサリクとチェコの精神』石川達夫：1995年より引用) ここからマサリクのどんな状況にあっても個の営みの尊さを忘れない姿勢がわかる。



ラーニT.Gマサリク博物館の「マサリク像」

## 5. ヴァーツラフ・ハヴェルについて

2020年度は共産主義博物館を訪れ、第2次世界大戦後に起こった1968年のプラハの春とその後の弾圧について。また1989年から始まったビロード革命について学ぶ予定である。そのための事前学習として2019年度のおわりに民主化運動の中心となったヴァーツラフ・ハヴェルについての学習を行った。戦後の共産主義の社会についてミラン・クンデラは次のように著している。「国民を厄介払いするために、まず国民から記憶が取り上げられる」「やがて国民が現在の自分、過去の自分をゆっくりと忘れ始める」(笑いと忘却の罫) このことは本校で学んできたヤン・フス、ムハ、マサリクの功績が1990年までいかに封印されてきたかを示している。



「ヴァーツラフ・ハヴェルの初演説の様子」  
写真展『1990』チェコ政府観光局より

ヴァーツラフ・ハヴェルはこの時代の社会をポスト全体主義とよんだ。政府は不安な国民に簡単に不安のない故郷を提供する。しかし、それを手に入れるためには国民は嘘や偽りで塗り固められたイデオロギーという名の「嘘の生」を受け入れなければいけない。受け入れるための対価として国民が受け渡すのは次の3つである。1つ目は理

性。自分で考え判断すること。2つ目は良心。自分の心が訴えること。3つ目は責任。自分の行為に対する応答。これらを自分が放棄すると人はやらされている感覚や無力感を持つ。そしてオートマティズムという見せかけの安定感を生む。いわゆる「空気を読む」「忖度する」という状態である。ハヴェルはこの「嘘の生」から脱却するためにどうしたらよいかを様々な経験から見出す。「真実の生」は「嘘の生」の中に眠っているとするのである。「それらは一定の条件を与えると人間の良心によって動き始め細菌兵器のような力でひろがっていく」と述べている。また、その活動は決して抵抗などではなく「良い仕事をすれば社会の批判になる」としている。(『マサリクとチェコ精神』石川達夫：1995年より引用) つまり、さらに「そのための構造(組織)は 開かれ ダイナミックで小さいものとなることができ、そうあるべきだ」としている。ビロード革命を引き起こすきっかけとなる、彼が始めた『憲章77』がそれを具現化したものだった。この中で「誰もが一般的な状況下で責任の一端を担っている」という言葉がある。この事は「アラブの春」や中国の民主化活動の「零八憲章」にも引用されている。力なき者が力をもった構造をつなぎ合わせるファシリテーターをするのである。大統領の就任演説で「我が国土は繁栄していません」と言う。戯曲家で言葉を知っているからこそ饒舌には語らず、言葉を大切にしている。「言語の儀式化」の問題もその1つである。「何について話しているかよりも、どういう言葉を用いているかのほうが、今日、重要性を増していることがある」という。言語の空洞化の問題についていち早く指摘しているのである。また彼は「約束する人は信じるな」という。問いかけを大切にしているのである。だからこそ、彼の言葉は力を持っているのだと思われる(『マサリクとチェコ精神』石川達夫：1995年より引用)。

## 6. おわりに

この3年間を通してチェコという国が様々な地理的、歴史的狭間の中で、様々な人物とその同志によって何度も立ち上がってきた様子を学んできた。ところが私はこれらの歴史上のできごとと現在のチェコの政治や人々との間に、実感が持てないような違和感を持っていた。しかしヴァーツラフ・ハヴェルについて学ぶことによってようやく今までの歴史と現在のチェコの政治や人々が結びれたような気がした。現在のチェコの傾向にもつながるのは「変化を求めつつも急がず、粘り強く取り組む姿勢」である。1968年のプラハの春では「人間の顔をした社会主義」を目指したが、2020年の日本は「人間の顔の見えない資本主義」かもしれない。現在の日本を見ると、共産主義時代のチェコの状況以上に社会主義的な面が見られる。日本の学校空間における同調圧力である。不登校生をはじめ多くの児童生徒がこの見えない圧力に苦しんでいる。それは教員や親による指導という形の他、空気を読むという集団行為の形で存在する。これによって主体的な学びが阻害される事も見受けられる。こうした閉塞感を打開するヒントとしてヴァーツラフ・ハヴェルの思想および民主化運動の経緯は参考になる。また3年間の学習で取り上げた人物に共通する点をあげるとすれば「巧言令色鮮な仁」ということである。彼らのように自分の言葉で語り「真の生」を実現する価値観を大事にしていきたいと思う。

## 参考文献

- 尾形勇 他 2007年 『世界史B』 東京書籍
- 国立新美術館 2017年 『アルフォンスミュシャ展カタログ』 求龍堂
- 矢田俊隆 1977年 『東欧史』 山川出版社
- 石川達夫 1995年 『マサリクとチェコ精神』 成文社
- 阿部賢一 2020年 『ヴァーツラフ・ハヴェル「力なき者たちの力」』 NHK出版